

13歳少女のイニシエーションに関する一考察

—初潮と猫イメージをとおして—

田 中 慶 江

1 はじめに

子どもが大人の世界に参加するには、昔は加入の儀式があった。象徴的な意味で、子どもとしての自分は死に、大人として生まれ変わる「死と再生」の儀式を経て一人前の大人と認められるのである。通過儀礼とされるこのイニシエーションで行われる事柄は、人が内的に生まれ変わるために必要なすべてが含まれていると言われている。子どもから大人へのこの思春期のイニシエーションを比較的スムーズに乗り越える子どもたちがいる中で、なかなかこの節目を乗り越えられずに苦しんでいる子どもたちがいる。このような子どもたちと心理臨床の場で接していると、夢や箱庭などの表現にイニシエーション儀礼に共通するイメージが生じてくるのを体験する。

河合(1975)は、民族学、文化人類学、宗教学以外には関心を持たれていなかったイニシエーションを、「心理療法におけるイニシエーションの意義」と題した論文で発表し、イニシエーションの臨床場面における重要性を初めて日本の臨床心理学の世界に紹介した。その中で、「制度としては消滅してしまったイニシエーションが、現代人の無意識界にはそのイメージを保存していることが明らかとなってきたのである」と述べている。そして『『異常』あるいは『病的』などというレッテルを容易に貼られそうな行動に対して、それがイニシエーションという人間の成長において必要な行為の一部と解釈されるとき、それは『意味』あるものとして本人にも、それを取り巻く人たちのも受けとめられる。それは時に長い道程であるにしても、イニシエーションの段階として知られている、分離・過渡・統合の過程を踏みしめてゆくことになる」(河合, 2000)。制度としてのイニシエーションは消えても、人間の内的体験としてのイニシエーションの必要性は、心理臨床の場で増してきているということを明確にした。

イニシエーションとは「加入させる人間の宗教的・社会的地位を決定的に変更することである」(Eliade, 1971)。つまり、ある個人が、ある段階から別の段階へ移行することによって、全く違ったものに生まれ変わることを可能にする儀式である。それらイニシエーションの儀式は、子どもから大人へと移行させる成人式、特定の秘義集団に加入するためのもの、そして、呪医やシャーマンになるための神秘的召命などがある(Eliade, 1971)。この中で最もよく知られているのが、思春期のイニシエーションとしての成人式である。

少女も少年も共に自我意識のある程度発達させながら共に成長してくるが、思春期を境にそれぞれ異なったライフサイクルを送ることになる。身体の成熟と共に少女には初潮が始まる。大人の女性になる身体からの最初の告知であり、この始まりをどのように受けとめていくかは、女性の人生にとって大切な心理的発達課題、イニシエーションであると言える。確かに、初潮の始まる前後に少女の心理的問題が表れやすいことは臨床的に知られていることであるが、正面から論

じられることは少ない。身体的成熟に伴う内的な混乱や不安定さと表現される世界は、意識化が困難なだけに取り上げられることが難しかったと思われる。女性の心と身体は男性よりも深いところで不可分に結びついており、その不調和は言葉にしにくい。河合は「女性原理というものが言語化を嫌う傾向を内包しているので、女性の成熟について語ることは相当な苦労を必要とする」（河合、1985）と述べている。

本論文では、よく取り上げられる成人式に比べてあまり光があてられてこなかった成女式を通して、少女が女性になっていくためのイニシエーションを明らかにしてゆきたいと考えている。エリアーデは、「死と再生」の中で、成女式に関して、男性の成人式ほどには研究されていないのであまり知られていないとし、とりわけ秘義については、きわめてわずかの記録しか持っていないと述べている。成女式は、男の成人式ほど広く分布していず、男の成人式ほど発達していない。成女式は集団で行われる男の成人式とは異なり個人的なものだという。それは成女式が初潮とともに始まるという事実から説明される。初潮の兆しがみえると娘は隔離され、年取った親戚の女たちか村の老女たちのもとに集められて、性と豊饒の秘義と部族の慣習と宗教的伝承を教えられる。儀礼の重要な要素は「隔離」であり、「体験」である。女性のイニシエーションである「血の秘義」（Eliade, 1971）は、初潮に始まり妊娠と続き出産で完了する。「女性にとって生命の創造者たることの啓示は、男性の用語には翻訳できない宗教体験を構成する」という。しかし「女性とは違って男性は成人式の訓練期間中、『見えざる』実在者を意識させられ、あきらかならざる、すなわち直接体験として与えられない、聖なる歴史を習得する。・・・少年にとって成人式は直接でない世界—精霊と文化の世界に導き入れられることである。少女にとっては、逆に、成女式は、表面的には自然な現象—性的成熟のあらわなし—の秘義に関する一連の啓示を含む」。

男性と女性のこのイニシエーション体験の違いを際立たせているのは、男性が自分の外に超越者の存在を意識する啓示と異なり、女性は自分の内に聖なる啓示を体験し、大いなる宇宙を意識しなければいけないということであろう。この内に向かうという行為は、女性にとって、ことさら重要なことのように思われる。なぜなら、女性の方が、より自然に近く、その心と体は密接に結びついている。それゆえ、自然の生命に根ざした身体性との緊密な接触をもたなければ、自分の核ともつなげられないからである。少女が女性として成熟していくためには、月と同じように周期的なリズムを刻む自分の体を、腑に落ちる体験として、体を通して、内面化することが必要とされている。

ユング派のエスター・ハーディング（Harding, 1985）は、未開人が女性の生理と月の周期の一致に超自然的な力を感じ恐れているのは、それを投影している何らかの心理的要因があると述べている。彼らは女性のもつ魅力、「マナの力」が、自らの戦闘意欲を失わせ、男性社会を破壊するので、この男の欲望を駆り立てるものを「邪悪」と捉えているという。そのため、男性にとって危険な女性を隔離することが、自らを守ることになるというのである。女性の側からすれば、毎月の隔離という孤独の期間に、女性の内にある本能的な力とより密接な接触を得ることができるとしている。現代のヨーロッパ文明は、月経のタブーをその心理的意味を理解せずに放棄したので、例えば、ヒステリーなどの身体的病気という無意識からの報復をうけてしまったという。なぜなら、女性の生そのものが周期的であるのに、その自然なリズムを無視したからである。こ

のようにハーディングは、女性と月の神秘的関係から、女性の隠遁生活の安全装置の側面と、内的意味を考察している。

日本では、玉谷（1985）が、少女から娘へ、結婚をへて母親へ、さらに中年期へと成長する女性の内面的な成熟の道筋の始まりとして、エリアーデの成女式を取り上げている。横山（1995）は、「神話の中の女性たち」で、成女式の秘儀性とそのタブーの側面をエスター・ハーディングのいう月の性質から論じている。母性という視点から、初潮を迎えた少女を考察しているのが東山（2006）である。東山は、母親の守りによって、初めて、少女の身体との出会いが、心理的イニシエーションとして内在化を可能にするとして、思春期の少女と母親との関係が、ほどよい距離感が保たれていることが必要であると述べている。それぞれエリアーデの成女式を下敷きしているように思われるが、思春期の少女の初潮に関する事例報告は意外に少ない。

その中で、岩宮（1994）が、思春期の少女の治療場面を、イニシエーション過程としてみる事例を発表している。直接的には初潮に関して考察してはいないが、少女が成熟していく過程で、かぐや姫イメージが重要な役割を果たしているとしている。筆者は、月と関連が深いとされている、猫イメージと初潮を迎えた少女の関係を、大人の女性となるためのイニシエーション過程という視点から捉えたいと考えている。初潮と猫イメージを少女のイニシエーションに結びつける試みを、恣意的と思われるかもしれないが、筆者の臨床経験からすると極めて腑に落ちることなのである。素材としてアニメーションと2つの事例を提示し、その上で臨床心理学的意味を考察したい。

II 魔女と黒猫

言語化に馴染みにくい女性の心は、理論化にそぐわず、文学や詩、神話などの物語で、その本質が語られてきたと言えるだろう。ここに、少女のイニシエーションの物語といえる宮崎駿演出の長編アニメーション、「魔女の宅急便」を紹介する中で、少女が女性になっていくことはどういうことなのか、そして主人公の設定がなぜ猫を連れた魔女でなければならなかったかを考えてみたい。

1. 当たり前のことと不思議の世界のさかい目

「今夜、キキは黒猫のジジと一緒に旅立ちます。

魔女は13歳になると、満月の夜を選んでふるさとの町を離れなければなりません。

修業のため、遠くの町で1年間たった1人で暮らすーそれが魔女の世界のきまりなのです。」

（魔女の宅急便,1989, 原作 角野栄子）

箒に乗って魔女のキキは黒猫のジジを連れて故郷を離れる。ある街に降り立ったキキは、面倒なことに巻き込まれそうになるのを同年齢のトンボという少年に助けてもらう。

ひよんなことから、キキはおソノさんというパン屋のおかみさんの家に下宿させてもらうことになった。そしてパン屋の仕事を手伝いながら、空飛ぶ宅急便の仕事を始める。さて、初めてのお客さんの届け物を強い風に煽られて森で失くしてしまったキキは、ジジにそっくりの黒猫のぬいぐるみを探しにうっそうとした森の奥に入っていく。そこでキキは、カラスに囲まれて絵を描いているウルストラという年上の女性に出会うことになる。ウルストラは月に向かって飛ぶキキの絵

を描くのだが、「魔法ってさ、呪文を唱えるんじゃないんだね」と言うウルスラの言葉に、キキは「うん、血で飛ぶんだって」とうなずく。ある日キキは老婦人から孫の誕生日のパーティにパイを届ける注文を受ける。ところがオーブンの具合が悪くてパイが作れないと知ると、キキはかまどに火を熾してパイを焼く手助けをするのである。だがパイを届ける途中で雨に合い、ずぶぬれになって寝込んでしまったキキは、故郷のお母さんを思い出して涙ぐむ。

キキが両親から離れて、新しい世界で出会ったのは、人生の様々な局面を生きている女性たちである。3人の女性は、何を表しているのであろうか。筆者には、祖母や母親、娘と円環的に続く女性のライフサイクルを通して、女性から女性に受け継がれなければいけない、大人の女性になるための知恵が語られているように思われるのである。

おソノさんはパン屋のおかみさんでもうすぐ赤ちゃんが生まれる。新しい生命を宿し、生み出すという役割を担った、母性の象徴としての女性である。パンの材料である小麦は豊穡を現し母性と密接な繋がりがある。森の奥に住むウルスラは、結婚前の乙女のようなものである。人と交わらず、カラスに囲まれて自分の創造性を伸ばそうとしているように見える。しかしキキと出会うことで「血」ということを意識する。魔女の血、画家の血と、「血」に結びつくことによって自分の本質に結びつくというのである。そしてキキは、苦労してかまどに火を熾し、雨に打たれる。これら一連の出来事を通して、キキは両親に守られていた子どもの世界から、心理的に分離するイニシエーションを経験しているのである。

物語の最後で、飛行船にぶら下げられたトンボをキキは空を飛んで助ける。文明の機器である飛行船は自然の風に乗ることができず、それを救うのは自然の風を捕まえてその風に乗って飛ぶことのできる魔女なのである。この本の原作者の角野栄子は、「当たり前だと思っているものを見えないところで支えているのが不思議な力だと思うのです。人間の成長には当たり前のことと、不思議の世界のさかい目を飛び、その二つを一緒にみる目を持つことがとても大切だと思っています。見えるものだけがこの世の総てと思うところにはやせ細った世界しか生まれてこないでしょう」と述べている。「当たり前のことと、不思議の世界のさかい目を飛び、その二つを一緒にみる目」を、今を生きる少女は果たしてもっているのだろうか。

「魔女の宅急便」を少女のイニシエーションの物語と捉えるにしても、主人公は魔女でなくても良かったはずである。しかし原作者は「今の世の中を生きる魔女の姿を伝えたかった」と言っている。黒猫を連れたキキで現される魔女性は、13歳の少女が、少女から大人の女性と成長するためには、理性を超えた、意識と無意識にまたがった「知恵」が必要であることを、女性である原作者が直感的に感じ取って描いたのではないかと思われるのである。

2. 猫の落下

「初めての仕事にキキは大張り切り。・・・高く高くもっと高く！ぐんぐん飛んでいきました」。

(魔女の宅急便,1989, 原作 角野栄子)

ところが、突然の強風にキキは吹き飛ばされ、届けものの黒猫のぬいぐるみを森に落としてしまう。キキは急降下して森に入ろうとしたが、カラスに阻まれて奥にいけない。そこで、日が沈んでからそっと探すしかないと、キキは黒猫のジジをぬいぐるみの代わりに届けて、再度1人で森に入っていくことにする。

象徴的解釈によれば、森は無意識を表すという。無意識の世界の住人とキキが交流するのに、猫的な存在が必要だったと考えられないだろうか。暗闇の世界（森）に通じる道を猫はよく知っているのである。そしてそこからキキが安全に帰ってくるために、本物の黒猫のジジが、ぬいぐるみの代わりに現実において、キキが森から戻ってくるのを待っていたのは非常に重要なことのように思われる。それは、現代のイニシエーションにおいて、その過程に没頭するために、そこから離れて俯瞰するもう一つの視点が必要なことを示唆しているようにも思う。現実世界から見れば、黒猫はぬいぐるみの代わりだが、無意識の側から見れば、ぬいぐるみは黒猫の身代わりとして、森にキキを導いている。黒猫は、キキを導きながらも見守っているという、心理療法過程におけるセラピストの役割と重なるものがある。

またイニシエーションが、ある段階から違う段階への境界を越えればいいというものではないことを示唆しているように思われる。地下に深く下降していかなければ、イニシエーションが意味あるものとはならない。より高く上空を飛んでいたいキキは、猫が落下することで下に目を向けることとなった。そこで「血」という自分に備わった本能的なものに、気付く。ふるさとの町を離れて、見知らぬ町で生活していくことは、上空を飛んで境界を越えたことに過ぎない。落下することで、自分の中にある、身体性に結びついた動物的で本能的なものに目を向けることになったのである。

思春期の自分の心と身体の変化をすんなり受けとめ、さしたる不安や悩みをもつこともない少女もいると思われるが、次に述べる事例の少女たちのようにこの段階でなかなか大人の女性へ変化できずに苦しんでいる人たちがいる。彼女たちにとって、下降して直視しなければいけない女性性の暗い側面は、彼女たちを脅かすものになっていたのだろう。そのような時、猫のイメージはどのような助けになるのであろうか。

III 事例

1. 心因性頻尿と箱庭に現れた猫イメージ

魔女のキキと同じ、13歳の少女の事例を取り上げてみよう。

父子家庭の中学2年生女子A子は、初潮の訪れと相前後してトイレが近くなり、教室に入れなくなってしまった。病院を受診したが内科的疾患はなく、心因性頻尿の症状と思われた。そのうちA子は学校に登校できなくなり家に閉じこもる。A子は1年間の面接を通して23個の箱庭作品を作り、自らの女性性を受け入れていく過程で母性との内的な繋がりをつけていった。この過程を経て心身症的な症状は消失して中学3年の新学期から登校を再開した。

初潮の始まりと共に、少女は自分の内に周期的に訪れる生理と向き合わなくてはならない。自分の知らない所で刻まれる成熟のリズムは、自分のコントロールを超えたものとして感じられたに違いない。頻尿の症状は今までコントロールできたものに対する自信を失ったことを示している。このように今まで自明のことだった自分の心と身体は、性の徴を境に未知の世界に開かれていく。つまり大人の女性になることと、自分の中に在る子宮という母となる可能性に気づかされるのである。

エリアーデは少女のイニシエーションに対して次のように語っている。

「成女式は、女性の性に『自然』にあらわれる秘義、月経のあらわれに限定される。この現象は

未開人にとってはあらゆることから、すなわち周期的清浄、豊饒性、治癒力と呪力を意味している。娘は自然の運行としておとずれる変化を意識し、これに由来する生存様式、成女の存在様式を身につけることになる」(Eliade, 1971)。

イニシエーションの儀式が失われてしまった現代、少女が大人の女性になっていくことをどのように内面化していくかということは、実に変な事だと思われる。今まで集団の守りの中で行われてきたイニシエーションの儀式を、個々の責任で成し遂げていかななくてはならないのだ。個人的で親密な人間関係の中でしかできないのが、現代のイニシエーションの特徴であろう。そのため現実の母親との関係がより一層重要になってくるのはいうまでもない。母親の守りがあって、初めて、少女の女性へのイニシエーションの変容が可能になるのである。

A子の母親は小学生だった彼女を残して他の男性のところへ出て行ってしまった。それ以来A子は母親とは会っていない。母親代わりを兼ねてA子を育ててきた父親にとって、A子の母親のセクシャリティーは許しがたいものだったろう。A子にとって父親は、父親であるばかりでなく母親でもあった。父親の手料理を語るA子の口ぶりは母親に対するものようだった。このねじれ現象の中で、A子が自分の女性性を受け入れていくのにブレーキが掛かったことは、想像に難くない。女性性の暗い側面を、父親を通して語られる母親から感じ取っていたからである。

女性性の本能的で、身体と結びついている未分化な側面は、箱庭(写真1)で現れた「猫」に集約されていると思われる。4分割した箱庭の左下の暗い領域の中心に置かれた猫は、まるで「魔女の宅急便」の森の世界と同じで、家や木々で回りを囲まれ外からは見えない。Thはこの猫が不思議の国のアリスに出てくる変幻自在の「チェシャ猫」に思えた。チェシャ猫はアリスが進む道の分岐点にニカニカと笑いながら顔を出し、またふっと消える魔猫である。箱庭の猫は、パワーを感じさせながらもどっかりとそこに座り動く気配はないように思えた。ところが、猫が箱庭に出現した頃、家に閉じこもっていたA子が、面接室以外に外出するようになったのである。図書館、本屋へと、閉じていたA子の世界が微かに開いたようである。半年後の箱庭(写真2)で、猫は山寺のある本能的な領域を出て、手前の花々と家のある女性的な世界に行こうと川を渡ろうとしていた。無意識の領域でひっそりとしていた猫が、動き出そうとしているのを感じた。その後、頻尿の一時的な再発があったが面接は続けられ、徐々に別室登校が可能になった。

写真1

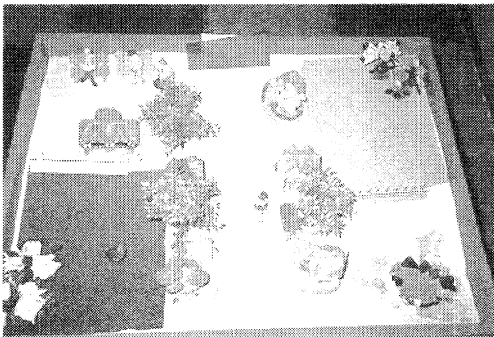
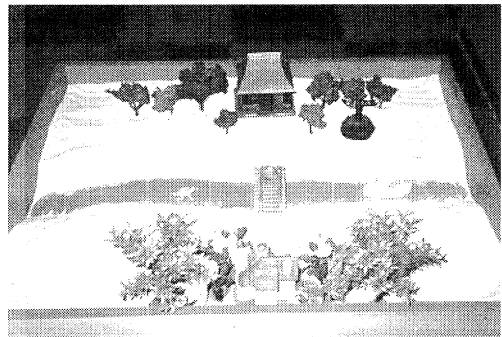


写真2



面接過程の展開点で現れた猫は何を意味しているのであろうか。アリスのチェシャ猫もそうだ

が、これは「魔女の宅急便」で猫が森に落ちた状況と似ている。猫を媒介として無意識との交流が始まったと考えられる。猫は未分化で本能的なものを現す(von Franz, 1999)。初潮によって意識された女性の身体と結びついた本能的なものが、猫に象徴化されているのだろう。現実の母親がどうあれ、父親に吹き込まれた母親の女性としての在り方は、女性の自然に根ざした本質を暗いイメージに変えた。それが頻尿となって漏れ出し、A子に脅威を与えているのである。つまり初潮に象徴される女性の本質的で本能的なものの内面化は、理屈抜きに身体が感じ身体が体現するものであるが、それが身体に留まることができず、頻尿という症状になって流れ出てしまっていると考えられるのである。A子がこのような猫の存在を受け入れるためには、セラピスト(以下、Th)との「身体性レベルの共感」(東山, 2001)ともいうべき時期をくぐり抜ける必要があった。頻尿の無意識レベルの苦悩と異なり、現実レベルの身体症状であるA子の腹部重鈍感などが、Thにぴったりそのまま移っていたことがあった。心で受けとめきれない重荷を、身体で表現しているA子の気持ちにThは共感しているつもりで共振れを起こしている可能性は否めないが、母性的な同一化とは、ある種このような身体レベルの響きあいともいうべき部分があるのではないだろうか。母親代理ともいうべきThとの間で一体感的境地を経て、苦痛が伴ったA子の生理が基本的なリズムを回復したことは、女性であることをある程度内面化できたと理解してもいいのではないかと思われるのである。

面接の最後に、A子は折り紙で内裏雛とピアノを作って面接室に飾った。自分の女性としての誕生とその情緒を奏でる心を、内裏雛とピアノで祝っているように思えた。

ハーディング(Harding, 1985)によると、未開社会においては少年たちとは違って「女性たちはただ1回のイニシエーション体験のために同様の隠遁に入りはしないが、彼女らは毎月数日間家を離れて1人になりながら、つまり彼女らを支配しているあの本能的な力とぴったりと接触しなければならない」としている。A子の場合も、自分の女性としての源泉に触れるために1年間の引きこもりが必要だったのだろう。その時、猫は、A子が女性としての大切な核に気付くための導き手の役割を果たしていたと思えるのである。猫はまた、A子を理解するためのThにとっても同様の導き手であった。

2. 密着した母娘関係を切り開く捨て猫

女性にとって必要な、孤独への欲求として不登校になった少女の事例を論じたが、母親と娘の結びつきがあまりにも強くてその引きこもりが長期にならざるを得ないことがある。

少女は母親との長い依存期間から巣立って個としての自分を作っていくには、いったん分離した母に、再び女性としての同一化をしなければならない。少年が母親と分離し、父親に同一化して男性としてのアイデンティティーを確立していくのとは、違った苦勞と葛藤があると言われている。

B子は小5の夏に、母親の実父の葬儀のため1ヶ月ほど母娘で遠方にある実家に帰省した直後から、学校に行けなくなった。その間、初潮が始まったのもあって、心身の不調が原因かもしれないと当初はおおらかに構えていた母親も、不登校が長期に渡るにつれ困惑し、無理やり連れていこうとしたり、担任に迎えにきてもらったりしたが学校へ行くことは出来なかった。中学へ進学する時は、環境を変えたら登校できるかもしれないという、藁にでもすがる思いで転居して違

う校区での再出発を期待した。しかしB子の方からの提案でもあった転居は功を奏せず、B子はますます深く家に閉じこもった。

中学入学後しばらくして、母親が学校のスクールカウンセラーをしている筆者（以下、SC）のところへ相談に訪れた。B子は家では好きな絵を描いたり、テレビを見たりと穏やかに過ごしているという。このまま誰とも関わらずにいるのでしょうかと、母親は不安そうだった。

母親面接を開始して半年ほど経った頃、面接中に母親の携帯電話が鳴ったことがある。B子からの些細な内容のものだったらしいが、それ以来面接中の母親の携帯に電話が掛かるようになった。何を二人で話しているのか、B子は気にしているという。SCは「一度一緒に来られたらどうか」と母親にB子への伝言を頼んだ。しかし面接室は学校内のカウンセリングルームである。人に会うことを避けているB子が来るかどうかは半信半疑であったが、そのうち母親にぴったりB子が付いてくるようになった。ほとんどしゃべらず母親の隣に座っているB子に接しているうちに、次第にSCは、B子が逆に母親に付き添っているのではないかと思えてきたのである。

母親の話はB子のことから自分自身のこと、夫婦関係の話になっていく中で、父親に苦労させられた母親を1人にさせないために、B子が家にいる構図が明らかになっていった。

B子が拾ってきた子猫が、世話が焼けるがかわいくて仕方ないと母親が語っていた時、B子が母親の話を通り「お母さんは猫のいいなりになってる。私は違う。かわいがる時はかわいがるけどいやな時はちゃんとと言う」と、強い調子で言った。初めてB子の声を聴いたSCは、そのしっかりした声に安心するとともに、B子からのメッセージを母親の女性としての在り方と理解した。母親1人での面接になった次の回で、母親は、B子がいやがるので、現在夫とは別に、B子と一緒に寝室で休んでいることを告げたのに続いて、上記の発言のもとになっていると思われる、B子と猫の印象的なエピソードを語った。熱心に絵を描いているB子の膝に猫が甘えて乗ろうとすると、B子は猫が絵と自分の間に入らないよう絵の上に覆いかぶさって、猫があきらめて去っていくまでじっとしてやり過ぎたという。そして、猫がB子の側を離れたとき「勝った」とつぶやいたのである。B子は何に勝ったのであろうか。

B子は母親の優柔不断さを嫌がっているように見える。猫に総称される女性の動物的で本能的な側面に振り回されることなく、自分は飼い馴らしていきたいと宣言したようにも思えた。それは、B子が猫と出会うだけでなく、猫と交流があって、猫に負けないで自分の主体性を取り戻していくことなのではないかと考えるのである。父親の女遊びと浪費癖は、B子が小学校低学年の頃がピークで、母親は生活費を捻出するために夜も働きにでていたという。しかし、B子の不登校が始まったのをきっかけに、父親の気持ちは家に向き始め、母娘主導で進められた転居の件も何も言わず従ってくれたようだ。それにしても家族の変容を促した不登校に、初潮を境になったことは2重の意味が見て取れる。ひとつには、大人の女性になっていくイニシエーションの過程で、母親が好ましい同一化の対象足りえなかったことである。それでも母親と娘は同じ女性に生まれ、反発しあおうとも子宮というもので繋がっているのをお互い発見するのである。離れようにも深いところで不可分に繋がっている母親と娘の関係に、言葉は意味を成さない。この母娘の結びつきの強さと、B子が自分自身でありたいと願う、布置状態を猫のエピソードがうまく現している。

IV 猫イメージと猫元型

初潮を迎えるということが、少女にとって大変大きな意味を持つことを論じてきた。だが、猫が様々なイメージを喚起する力を持っているとはいえ、なぜ、女性の、とりわけ少女の夢や箱庭・描画などに猫のイメージがよく現れるのであろうか。

順に10個の要素(川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石あるいは岩)をクライアントに告げ、それによって風景を描く、風景構成法を研究している皆藤(2007)によれば、思春期の少女は、9番目に位置する動物に猫を描くことが多いという。少女と猫はどことなく似ている。同じペットとはいえ、飼い主に連れられて散歩している犬に比べて、猫は気ままにあちらこちらをほつき歩いている。その独立的でわがままな感じ。さっきまで爪を立てていたのに、ごろごろすり寄ってくる変わり身の早さ。表裏一体の優しさと残酷さ。どんな細いところでもすり抜けてしまう柔らかな姿態。一体何を考えているのかさっぱり分からない神秘的な目など、思いつく限りでも、猫と少女はこれだけ似ている。思春期の少女の不可解さを表すのにこれ以上ぴったりのイメージは見当たらないように思われる。

しかしながら、上に述べたように猫と少女がよく似ているだけでは、臨床場面で私たちが猫のイメージに頻繁に出会う説明としては不十分であろう。筆者は、思春期という心と身体の大変な変化の嵐の中で、ばらばらになってしまいそうになる主体を守るための、魂のようなものとして猫が出現しているのではないかと考えるのである。猫イメージは女性の心の奥底にあるものの中で、①身体性との深い結びつき、②媒介としての働き、③直観的把握の3つの特性を、浮かび上がらせているように思われる。①の身体性との深い結びつきは、女性にとって自分の身体性と深く結びつくことは、自分の核と結びつくことと等価であるということである。また症状などの行為そのものが、身体言語のように、ダイレクトにThに響いてくるのは、少女特有のことである。少女の身体性に結びついた表現と同じように、この体で語るという習性を猫ほどもっている動物は他にいないのではないだろうか。②の媒介としての働きとは、「魔女の宅急便」の例で見たように、「当たり前のことと不思議の世界のさかいを見る目」、つまり2つの領域を一緒に見ることのできる柔軟な動きである。猫の行ったり来たりするしなやかな動きが大切に思われる。このしなやかさは、ウィニコット(1951)のいう移行対象にも繋がっていく。母親から離れていく際、幼児はタオルなどの柔らかいものを手放さず、それを支えに、自立していくと言われている。自他の境が無くなってしまう様な感覚を覚えながら、猫の柔らかな体を抱きしめ猫と対話して成長していく少女も多いことと思う。逆に、2つ目の事例の母と娘だけの世界に、第3のものとして猫が出現する場合が考えられる。猫の存在は、母娘の一体感の世界に間が生まれる瞬間でもある。猫によってB子は母親とは違う女性としての在り方を宣言することになる。③の直観的把握とは、「彼女の本質は、誰もが灰坊にだまされているときに、その本性をただちに見破った点にある。そのような『女性の知』が彼女に幸福をもたらすのである」(河合, 1982)。誰もが外見に惑わされて灰坊の才能に気づかずにいるときに、その価値を発見して幸せになるような、世間的な評価から自由でいて、瞬時に事の本質を見極め行動できる知恵のことである。

筆者にはこの3つは離れがたく結びついていて、連動して動いているように思える。というのは、3つともが母となるために、女性の体に本能的に備わっている、ひょっとすると動物にも備わっているかもしれない、子どもを守るための機能ではないかと考えるからである。武器の使用

や自分の腕力で敵と戦う男性とは違って、女性にとっては自分の体が武器であり、守りである。生き残って子どもを育てていくためには、慎重に勤を働かせながら周りを観察し瞬時に事の行方を見極めなければならないのだろう。このような、ときに巫女的ともいえる特性は、初潮後に顕現してくることが多いと思われる。

そこで次に、ドール・グリーン「猫元型」(Dale-Green, P.1963)に沿って猫の歴史的、文化的側面を素描し、多くの国々に共通する、猫の魔術的あるいは巫女的なイメージがどのように発展してきたかを見ていくことにする。

歴史的に猫が元型的なパワーを賦与されたのは、エジプトであるという。猫は非常に初期のころからイシスに献じられた神聖なものと考えられていた。それはイシスとイシスの夫・オシリスの間の娘としてであった。その後、偉大な猫の女神バステトとして22王朝期の頃より、崇められた。彼女の信仰は、プバステスの地域で盛大で、レディ・プバステスと呼ばれ、その寺院は水に囲まれ、市の中央に建っていたとされている。バステトは、女性と考えられているが、しばしば彼女の父、ラー・オシリスと同一視された。運命の神・ラーへの同一視によって、猫は太陽と結びつけられ、宇宙の安定を脅かす暗闇の支配者、蛇のアポピスと毎夜戦っていると信じられていた。

実際、猫は蛇の天敵であり、ねずみや害虫から穀物を守ってくれる貴重な存在として大切にされていたのが、女神として崇拝された背景にはあると思われる。同じように高度な文明が栄えていた中国でも、猫は肯定的なイメージで捉えられていた(田中, 2000)。多産、豊穡と女性の肯定的なイメージが出発点であった猫が、次第に否定的なイメージを合わせもつようになったのは、キリスト教の台頭と無関係ではないだろう。

猫は太陽に結びつけられる一方で、月に似たものとしても信仰されていたという。月に太陽が反射しているように、暗闇の猫の光る目は、太陽光線が反射していると信じられていた。後期エジプトでは、バステトはアルテミスと同一視されていた。アルテミスは女狩人で自然の処女の女神であり、子どもの誕生を司る多産と女性性に結びついている。ある神話によると、ギリシャの神々がテュフォンに追われてエジプトに逃れた時、アルテミスは猫に変容し、そのまま月に避難したとされている。そしてヘカテーも猫に変わったという(Von Franz, 1999)。ギリシャのヘカテーは、天界、地上、冥界を支配する原初の3相一体の女神であるが、後に変化する月と関連づけられる。魔法、インスピレーション、つまり理解力は彼女の賜物であるという(Harding, 1971)。ヘカテーは、欠けていく暗い月によって代表され、中世では魔女たちの女王となった。この流れの中で、猫は魔女の仲間とされ、悪魔のパワーを与えられることになる。本能や性という自然な要素から切り離されたキリスト教は、破壊的で本能的な女性性のシンボルに猫を結びつけたのである。しかし豊田(2004)は、今日生きる女性たちに欠けているのは、ヘカテーで現されるような資質であるという。つまり、光も闇も、善も悪も、過去も未来も区別することなく同時に理解するような知恵である。ヘカテーで現されるものとは、今まであまり価値を置かれていなかった女性の資質であり、先に筆者が述べた3つの女性の特性①身体性と深い結びつき、②媒介としての働き、③直観的の把握とも重なるところがあるように思われる。

エジプトやギリシャの神々は、それ以前の神々の性質を吸収する形で変化してきた。またキリスト教においては、矛盾した性質を聖母と魔女と異なったものに振り分けてきた歴史的、文化的

背景がある。このため、猫は聖母マリアにも魔女にもリンクし、太陽にも月にもリンクするという両極端の性質を自由に行き来する変幻自在なイメージが出来上がってきたと思われる。イメージは、心の奥底にある豊かなものを意識へとつなぐ媒体として重要な役割をもっている。豊かでありながらも狂気にも変りうる、無意識内に起こっていることを、イメージによって客観視することで、その力に押しつぶされずに耐えることができるのである。ここで思い出されるのがケルトの伝説 (Von Franz, 1999) である。ある洞窟に設えられた神託所に銀の寝椅子に寝そべるほっそりした猫がいるという。その猫は善と悪の知識を持ち、その善と悪との間の橋渡しをするようになっている。内的・外的生活の間と同様、神や超自然の力と人間の間を仲介するものとして行動する。2つの領分に出入りしてそこに精通しているのでどのようにバランスを取りながら葛藤に満ちた2つの価値を保持していくかの、秘密を伝え教えることが出来る知恵をもっている。これはアニマのイメージに近いものがある。

V おわりに

河合 (1976) が引用している、幻聴に悩むアメリカ女性の夢を紹介する。

「第3の夢で、彼女は博物館にいる。そこで、石作りの猫が生命をふきかえし、彼女に何を探しているのかと尋ねる。彼女は古代の秘密を知りたいのだと答える。猫は彼女を地下室へと導き、そこで彼女は、たいまつを持った古代の人々に会う。彼らは彼女が彼らの仲間になんか入りたいのかと尋ね、彼女は、はいと答える。そこで、彼女はそれに続くイニシエーションに自分を捧げることを誓う」。この女性は今までの世界から地下の世界へ向かい、人間の心の奥底にある獣性を人間的なものに手なずけるディオニソスの神、その教団へのイニシエーションを受けなければならない。このことによって、現代の女性の意識は、心の深みへと基礎づけられる (河合, 1976)。

ここで猫については何も語られていないが、この猫がエジプトの女神バステトであることは明らかである。石で作られた猫が命をふきかえし、神々しい姿を現し、人間の本能的な欲望、動物性がうごめく地下の世界へ導くのである。様々な猫のイメージの中で、この夢の女神バステトは、古代の太母神であるイシスに結びつけられるのがふさわしい。紀元前1700年ごろに崇拜されていたイシスは月の女神であり、交互に暗かったり明るかったりする月の性質を受け継いで、地上の総ての生命の母であり、豊穡を与えるものでありながら、世界の破壊者となる。この特徴を女神バステトは受け継いでいると考えられる。事例の女性は本当の意味で、女性としてイニシエートされていなかったのだろう。石作りの猫が生命をふきかえず光景は、「魔女の宅急便」でぬいぐるみの猫が森に降りていって、キキが女性としての源泉に触れることと重なっている。石作りの猫も魔女の黒猫も、女性の本質的なものを表していると同時に、そこに導くものでもあると思われる。

女性は第3の夢を見た時、不思議な畏れの感情を覚えたという。分析者はこの畏れの感情に注目している。河合 (1976) は、現代の我々は、不可知なものを信じてそれに身を捧げるときに味わう畏れの感情を忘れてしまったのではないかという。この女性の畏れの感情は、成女式で、「女性にとって生命の創造者たることの啓示は男性の用語には翻訳できない宗教的体験を構成する」(Eliade, 1971) ことに通じるものがある。

科学文明の恩恵に預かって成長してきた現代の少女たちにとって、訪れるものを畏れの感情を

もって受け入れることは、ことのほか難しいことであるに違いない。京都では、旧暦の3月13日に数えて13歳の子ども達が、嵐山の法輪寺に知恵を授かるために参拝する十三参りがある。帰途、渡月橋を渡るとき振り返ると授かった知恵がなくなるという。知恵参り、知恵もらいともいう(広辞苑、大辞泉)。とくに少女は、この日初めて大人用の着物地一反を使った本身断ちの着物に袖を通すことになっているという。身体の成熟が始まる13歳の時期に知恵を授かるために神仏に参拝する、子どもから大人になる通過儀礼である。

知恵は「授かったもの」として、持って帰らねばならない。振り返ることで認識したものは、知恵ではなく知識に変化してしまうのである。合理的に割り切れないものがあることを、初潮という身体を通して知るのが現代の少女のイニシエーションの始まりであろう。しかし、「血」で象徴される女性の本能的なものさえ自分で操作できるという、心と身体が切り離されてしまっている少女が増えてきているのが現代の特徴である。症状というものがぎくしゃくした心と身体を結びつける役割を果たしているという視点に立てば、臨床場面で出会う少女たちは、自分の内界からのメッセージを、いかに自分らしい生き方に発展させていくかの、まさにイニシエーションの過程にいたのである。

初潮と猫イメージを中心に、少女のイニシエーション過程を考えてきた。事例と文献の考察によって、初潮という身体の変化を心理的に内面化していくためには、猫イメージが貴重な働きをしていることが明らかになったと思われる。人間の理性を越えた、宇宙の動きに身を任せるような啓示が、初潮を迎えた少女たちに訪れるのである。その変容を可能にするのは、自分の身体を通じて自分の内に向かい、そこから出てくるメッセージに耳を傾けて、心と身体の調和を図ることだと思われる。調和を体現しているのが猫のイメージだと思われる。

文献

- Dale-Green, P. (1963) : The Archetypal Cat, Spring Publications, Inc. Dallas, Texas
Eliade, M. (1971) : 生と再生. 堀一郎訳. 東京大学出版会. p.94-103
Harding, M. Esther (1971) : Woman's Mysteries : Ancient and Modern , G. P. Putnam's Sons, New York. (樋口和彦・武田憲道訳 1985 女性の神秘. 創元社.)
東山絃久 (2001) : 日本心理臨床学会第20回大会でのコメント
東山弘子 (2006) : 母性の喪失と再生. 創元社. p. 27-28
橋本やよい (2000) : 母親の心理療法. 日本評論社
岩宮恵子 (1994) : イニシエーション過程としてみた治療場面. 箱庭療法学研究, Vol.7(2), p.3-14
皆藤章 (2007) : 私信におけるコメント
河合隼雄 (1975) : 心理療法におけるイニシエーションの意義. 臨床心理事例研究, 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 2. p.123-128
河合隼雄 (1976) : ユング理論の再認識. 母性社会日本の病理, 中央公論社. p.93
河合隼雄 (1982) : 昔話と日本人の心. 岩波書店. p.229
河合隼雄 (2000) : イニシエーションと現代. 心理療法とイニシエーション, 岩波書店. p.10
河合隼雄 (2000) : 猫だまし. 新潮社
Lurker, M.(1974) : Lexikon der Gotter und Symbole der alten Agypter (山下圭一郎訳「エジプト神話シンボル事典」大修館書店、1996)
宮崎駿監督・角野栄子原作 (1989) : 魔女の宅急便 (アニメーション映画). 徳間書店
玉谷直実 (1985) : 女性の心の成熟. 創元社. p.4-12

- 田中貴子 (2001) : 鈴の音が聞こえる一猫の古典文学誌. 淡交社
- 田中慶江 (2003) : 心因性頻尿から不登校に至った中学生のスクールカウンセリング. 心理臨床学研究, Vol.21(4), p.329-340.
- 豊田園子 (2004) : 魔女と心の闇 安田喜憲 (編)「魔女の文明史」八坂書房. p.211-233
- 横山泰子 (2006) : 化け猫、海を渡る. 特集犬と猫と. 浮世絵芸術No. 152. p.14-26
- Von Franz, M-L (1999) : The Cat: A Tale of Feminine Redemption. Inner City Books. p.55-57
- Winnicott, D.W. (1951) : Transitional objects and transitional phenomena, In Through Paediatrics to Psycho-Analysis. London, Hogarth. (北山修監訳、1990「移行対象と移行現象」『児童分析から精神分析へ』岩崎学術出版社、p.105-126)
- 横山博 (1995) : 神話の中の女性たち. 人文書院, p.13-22

(臨床実践指導学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

A Psychotherapeutic Study of A 13-year Old Girl's Initiation into Adulthood: Relevance of the Cat Image

TANAKA Yoshie

This paper considered a 13-year old girl's initiation into adulthood as marked by the onset of menstruation, focusing on the psychotherapeutic use of a cat image. The onset of menstruation marks the initiation of womanhood and is an essential but subjective experience through which all girls pass. The ceremonies and "rites" traditionally marking this experience have commonly been lost in modern societies, but the initiation process can be reworked in psychotherapy through the use of images. One particular image which can be used is that of a cat, an image which connects fundamentally with the female psyche. The cat can be seen as a potent medium forming a bridge between good and evil with knowledge of both. The cat image also connects internal and external experiences, and supernatural forces with the internal world. As it has access to, and is at home in, both of these spheres, the image can be used as a source of wisdom and also to teach girls how to hold conflicting values in balance. I illustrate these points by reference to two case histories and other examples.